



東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター
The Newsletter **CNEAS**

第 37 号

● 目次 ●

巻頭言：本年度の活動計画	1
谷口宏充教授 最終講義「火山と私」.....	2
山田勝芳教授 最終講義「東北アジアのユートピアを追って」.....	3
最近のセンター共同研究	4-6
客員教授紹介	7
シベリアだより	7
活動風景：モンゴル実験風景	8
編集後記	8

巻頭言 本年度の活動計画



センター長 瀬川 昌久

2007年の4月にセンター長を拝命してより、1年余が過ぎました。この間、私がセンターの運営を何とかこなすことができできたのも、ひとえにセンター内外の関係諸氏の皆様のおかげと感謝しております。私にとって2年目のセンター運営ですが、この場を借りまして今年度の活動計画について少しく整理してみたいと思います。

まず、国際交流につきましては、ロシア科学アカデミーシベリア支部との間に共同ラボラトリーの設置が実現しましたので、これを活用した諸事業に取り組んでゆく予定であります。同時に、世界各地の他の学術拠点の間にも、密接な協力と信頼の関係を築いてゆく必要があり、既に去る4月には韓国の高麗大学の中国学研究所と日本学研究センターとの間に部局間交流協定を締結しました。さらに、フィレンツェ大学、内蒙古大学蒙古学学院、ノボシビルスク大学東洋学科、北海道立北方民族博物館等との各種学術交流協定も現在準備をすすめているところです。

次に、センターの組織に関してですが、国立大学の附置研究所・センターの位置づけが抜本的に見直されようとしている現在、本センターとしても長期的な視野に立ってその存在意義や研究戦略を考え直す時期に来ております。この春、井上総長の諮問による本学の「人文社会系推進戦略検討委員会」が組織されたことを受け、センターとしては本学の文系諸部局の協力を得ながら、特に社会科学系の分野の充実、同分野における共同研究プロジェクトの立ち上げなどに努力してゆこうと考えております。そして、文理連携に基礎をおいた総

合的な地域研究の拠点として、全学的な支援のもとに一層の組織整備を進めてゆきたいと願っております。

研究活動としましては、昨年より制度化しましたプロジェクト研究部門の各研究ユニットを引き続き強力にバックアップしてゆきます。同時に、センターが提起する学内諸部局・諸分野の横断的事業である「地域社会を災害から守るための防災科学研究拠点の形成と地域連携事業」（代表者・平川新教授、本年度の総長裁量経費として採択済）を推進し、また全国的な研究組織連携事業として「アジアの地域・環境に関する情報ネットワーク拠点創出事業」（総合地球環境学研究所等全国14組織）に主体的に参加するなどの取り組みを行っています。

研究活動を支える外部資金に関しては、このほど科学研究費補助金・特別推進研究に「清朝宮廷演劇文化の研究」（代表者・磯部彰教授）が採択されるなど、着実な前進が見られます。また、懸案となっている研究スペース狭隘の問題についても、7月から入試センター上階に170㎡ほどの研究スペースを借り受けることができました。これら研究活動の基盤拡充に関しては、今後もより一層の努力が必要である点は言うまでもありません。

最後に、センターは本年度中に「外部評価」を実施する予定であり、当面重点的に取り組んでいる上記の諸課題を含め、外部の評価委員の方々から本センターの態勢や実績について客観的な評価をしていただくことになっております。

谷口宏充教授 最終講義 「火山と私」

谷口宏充先生の最終講義が、「火山と私」と題して、平成20年2月29日に東北大学川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟6階大ホールで行われました。

谷口先生は昭和49年3月に、東北大学大学院理学研究科地学専攻で理学博士の学位を授与され、同年4月に大阪府教育委員会大阪府科学教育センター研究員に着任されました。教育関係者の研修指導に当たられる傍ら、大学院時代から始められたマグマ物性に関するご研究を進められました。平成9年7月に東北大学東北アジア研究センター教授に着任され、同センター地球化学研究分野を担当し、平成20年3月末にめでたくご定年を迎えられました。

谷口先生の東北大学ご在職期間は10年あまりと決して長くはありませんが、その間に研究室をゼロから立ち上げ、3人の学生に博士の学位を出すとともに、ご自身もめざましい研究成果を挙げられました。中でも中朝国境に跨る白頭山の10世紀の巨大噴火と周辺王朝の変遷に関するご研究、火山探査移動観測ステーション(MOVE)の開発、ダイナマイトを用いて火山爆発を模擬する「野外爆発実験」など、一見奇抜とも思えるアイデアを次々と実行に移し、学問界に新風を吹き込みました。

最終講義は、学生時代に調査を始めた神津島・式根島火山の話に始まり、くさやの干物や島焼酎が楽しみだったといった裏話を交えながら、白頭山、MOVE、野外爆発実験などを中心に進められました。単に成果を紹介するのではなく、時にユーモアを交え、また白頭山研究では国際政治情勢に翻弄された苦労話を披露されるなど、先生のこれまでの足跡が垣間見られる内容でした。

最後に先生は、「石っこ賢さん」と呼ばれるほど石に関心を持っていた宮沢賢治に自らを重ね、次のような詩を披露して講義を締めくくられました。ユーモアの中にも、私たち後進へのエールが込められた最終講義でした。



最終講義風景

君がどこかのフィールドを彷徨っているとしよう。そこにはなにかの景色が見え、足もとにはなにかわからん'石ころ'が転がっているに違いない。

よくよく見ると、その景色は美しい名画の一場面かも知れないけれど、ほとんどの場合、国分町の行きつけ飲み屋の一幕だろうね。

足もとの石ころは、運が良ければ形のよい紫水晶かも。マントル起源の柘榴石やかんらん石かも知れないし、第三紀層からのオパールかも知れない。そしてもっと運が良ければキンバライト中のダイヤモンドだ。でもやはり単なる道ばたの石ころだろうね。

だけど君が、最初からダイヤモンドだけに気をとられていたとしたら、虹色のオパールの美しさ、血のように赤い柘榴石、透き通ったウグイス色のかんらん石、まして道ばたの石の丹念に磨いてあらわれる巧妙な美しさを味わうことは決してないであろう。もちろん、美しい景色を見ることは絶対はないのだ。

フィールドに行こう。かぐわしい森の香りと清々しい海の香りをかぎ、美味しい酒を飲み、色々な発見をし、そして多様な価値を感じ取ろう。

石っこ谷さんの迷詩集より



最終講義記念写真



祝賀会

山田勝芳 教授 最終講義 「東北アジアのユートピアを追って」

2008年3月をもって定年を迎えられた東北大学東北アジア研究センター教授山田勝芳先生の最終講義「東北アジアのユートピアを追って」が開催された。山田先生は、東北アジア研究センターの創設に際して中心的な役割を果たされ、東北大学における地域研究に多大な貢献をされた。山田先生は、1964年に東北大学文学部に入学、本学大学院文学研究科東洋史専攻で修士課程・博士課程を修められた後、北海道教育大学函館分校で助手・講師・助教授を勤め、1977年4月に本学教養部助教授とられた。以後、教養部、大学院文学研究科、大学院国際文化研究科、大学院環境科学研究科で教鞭をとられる一方、1993年に文学部附属日本文化研究施設、1996年5月の東北アジア研究センター創設後は同センターにおいて、中国史、東北アジア地域史に関する研究に顕著な業績を上げてこられた。

山田先生は、中国古代史、とくに秦漢代の財政史の研究において多くの論著を有する。その著『秦漢財政収入の研究』は、「墾田」「田部」問題及び漢代の税率の変遷、財産税問題、徭役・兵役、塩・鉄専売における均輸平準、雑収入、刑徒の労役も含めて、当該期の国家財政の全体構造を解明したものである。また『中国のユートピアと「均の理念」』においては、「均輸平準」などに見られる「均の理念」を中国独自のユートピア思想とする視点から検討し、中国史において、支配層・知識人の理念・理想としてあった「均の理念」が、唐代以後民衆レベルにも浸透し、宋代以降の民衆反乱のスローガンとなるなど、社会政治改革のキーワードとして、現代に至ってもなお重要な理念であるとする認識に立ちつつ、全中国史を貫くユートピア思想として「均の理念」を位置づけたものである。

このような山田先生の中国のユートピア的思想に対する関心は、中国近代の歴史にも及び、特に近年は、日本の傀儡国家たる満洲国にかかわる研究を展開されている。先生の最終講義「東北アジアのユートピアを追って」は、満洲国皇帝溥儀の側近という要職にあった工藤忠の生涯、事績を中心に論じたものである。

先生は、まず上述のような中国のユートピア的関心への関心を、共産主義など東北アジア近代に見いだされるユートピア的思潮への関心と接続させなが

ら、満洲国をもそのような思想的系譜の中に位置づける。特に山口重次が書いた資料や、山室信一らの先行研究を参照しながら、対立する共産主義にも範をとったその王道主義・協和思想にユートピア的性格を見いだす。そのような満洲国の性格を体現した人物として先生が着目するのが工藤忠である。清朝復辟派の巨頭升允との交友を背景に復辟派となった工藤は、甘肅など中国奥地の視察旅行を通じて中国の事情を熟知する一方、アジア主義者の集う老社会に加わる。後、溥儀の天津脱出に同行し、満洲国が建国されると、彼は執政府侍従武官・満洲国陸軍中將、さらに宮内府侍衛処長、同顧問官となり、溥儀の側近として活躍するのである。

山田先生は、さらに中国共産党の成立過程や、コミンテルンを通じたソ連との関わり、これに対する工藤の観察などにも目を配りながら、講義の結論部分において、独裁体制を生み出した共産主義（ポリシェビズム）の組織論・合目的論が反共産主義あるいは共産主義に脅威を感じた国家や組織に影響し、その地域や国家固有の現れかたをしたのであり、そのアジアにおける例として満洲国があると論じた。

山田先生のご研究は、長い時代と広い地域に視圏を定めた東北アジア地域史の実践として、我々後学を導くものと言える。先生の一層のご活躍を期待したい。

(岡 洋樹)



最終講義をする山田勝芳先生

最近のセンター研究会

シンポジウム
「帝国の貿易—18～19世紀ユーラシアの流通とキャフター—」

3月7日（金）に東北アジア研究センターの恒例行事の一環として、シンポジウム「帝国の貿易—18～19世紀ユーラシアの流通とキャフター」が行われ、数十名の参加者で賑わった。このシンポジウムは、18～19世紀間に露清間で行われていたキャフタ貿易に焦点を当て、広大なユーラシア大陸の流通のダイナミズムを照射することを目的に企画された。今日では関心を持たれることは少ないが、ロシアとモンゴルの国境付近に位置するキャフタは、かつてモスクワと北京間における商品輸送の中継拠点であり、イルクーツク近郊に住むシベリア商人と清（中国）の山西商人が両帝国の貿易を担った。シンポジウムには外部から4名の講師と2名のコメントーターを招いて盛大に行われた。午前の部では濱下武志氏（龍谷大学国際文化学部・教授）が「内陸中国と海洋中国の歴史サイクル」と題して、基調講演を行った。濱下氏は全体のテーマである露清貿易と関連させ、露清間には陸のルートと海のルートが存在したことを指摘した。



基調講演を行う濱下氏

午後の部は第1セッションと第2セッションから構成された。第1セッションでは「モノの流通から見たキャフタ貿易」がテーマとなり、森川哲雄氏（九州大学比較社会文化研究院・名誉教授）による「大黃を巡る露清関係とキャフタ貿易」と題する報告が、また、塩谷昌史（東北大学東北アジア研究センター・助教）による「キャフタを通じた中国茶のロシア向け輸出」と題する報告が行われた。第2セッションでは「商人とキャフタ貿易」がテーマとなり、森永貴子氏（北海道大学大学院文学研究科・助教）による「キャフタ貿易に見る露清商人の組織と商慣行」と題する報告が、劉建生氏（山西大学晋商学研究所・所長）による「山西商人とキャフタにおける対ロシア貿易」と題する報告が行われた。劉建生氏は今回のシンポジウムで唯一の外国からの招待者であり、中国に



コメントーターの澁谷氏と高氏

おける山西商人研究の第一人者である。劉氏は日本であまり知られていない山西商人の事実を明らかにした。

4人の報告が終了した後、高宇氏（立教大学経済学部・講師）により「山西商人の観点から」のコメントが、澁谷浩一氏（茨城大学人文学部・准教授）により「露清関係史の観点から」のコメントが行われた。高宇氏御自身が中国の山西省出身ということもあり、近年の中国における山西商人の関心の高まりについてコメントし、澁谷氏は日本における東洋史における露清関係の位置づけについてコメントした。最後に総合討論が一時間行われ、司会者から全体に関する質問が各報告者に投げかけられる一方で、聴講者の方々から活発な質問と意見が出された。今回のシンポジウムを振り返ると、今後の課題は中国側での露清貿易に関する研究と、ロシア側での露清貿易に関わった商人に関する研究を、比較対照させることであると思われる。その意味で、森永氏と劉氏との対話は重要であった。このシンポジウムの内容は、東北アジア研究シリーズの一冊として出版される予定である。

（塩谷 昌史）



総合討論の様様

共同研究「旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究」第5回研究会

モンゴル国は、1990年に社会主義を放棄し市場経済への道を歩み始めた。経済的な自由化とともに、それまで抑圧されていた仏教を中心とする諸教団の活動が復興し、外国宗教の流入という新たな現象もみられるようになってきている。特にキリスト教の成長は目覚ましく、援助活動や経済活動を通して宗教以外の領域にも大きな影響を及ぼしてきた。キリスト教徒をモンゴルにおける新たな宗教的マイノリティとすると、彼らの教会を通じた経済的活動は一種のマイノリティ・ビジネスと捉えられるだろう。

教会の諸活動における経済的側面には、いくつかの種類が上げられる。まず、教会自体がもっている経営体としての側面であり、国外からの支援と信徒からの寄付を主たる収入源として、教会職員を養っている。彼らの職種は、牧師、長老、日曜学校・語学学校の教師、通訳、門番など多岐にわたる。教会のもつ経済的な他の側面としては、貧困な信徒に対する金銭、物資の直接的な援助とともに、土産品製作などの内職の提供がある。

このような経済活動は、彼らの宣教や宗教活動と密接に関連している。それゆえ、キリスト教の受容という現象そのものが、ポスト社会主義期におけるモンゴルの経済状況を象徴するものであると言えるだろう。特に興味を引かれるのは、人々が経済的な援助と精神的な救いをどのように認識し、それが社会主義を経たモンゴル人の経済観念をどのように反映しているかという点である。なかでも私的所有観念との関連でモンゴルの公私問題に目を向けるなら、あらゆる分野で私的なもの生成が抑制されてきた社会主義時代において、宗教をめぐる公的な禁制が、逆に家庭などに宗教を隠棲させ私的領域における「救い」の土壌を醸成してきたと言える。いわば、ポスト社会主義期における組織的な宗教復興は、そのような私的宗教をめぐる諸教

団の競合と再編成の過程であった。

社会主義の崩壊によって「残酷な」資本主義社会に投げ出された人々は、神の直接的な啓示を強調する個人主義的信仰と信徒間の強い共同性を併せ持つキリスト教を、経済と宗教の両者を包含する新たな原理として受け容れてきたのではないだろうか。

* * * *

この報告は、2008年2月19日（火）に東北アジア研4階第二セミナー室で行われた共同研究「旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究」第5回研究会の発表要旨である。当日のプログラムは、これ以外に「プスコフ市における企業調査」（塩谷昌史・東北アジア研）も行われた。宗教学と経済学の双方のアプローチによる旧社会主義圏での調査研究の違いが浮き彫りになり興味深かった。

滝澤克彦

（東北アジア研究センター兼務教員／東北大学大学院文学研究科）



ウランバートル市内のキリスト教会

共同研究「旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究」第2回研究会「歴史の再定義—旧ソ連圏諸国における歴史認識と学術・教育—」

本研究会は、旧ソ連圏諸国・地方（モンゴル、ロシア連邦サハ共和国、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、コーカサス諸国）を対象として、社会主義体制崩壊後の各国・地方における歴史認識、文化表象、アイデンティティ再構築の状況を比較検討しようとするもので、科学研究費補助金基盤研究Bによって運営されているものである。第二回の研究会は、平成20年2月24日、東北アジア研究センター大会議室で開催された。今回はウズベキスタンとモンゴルから講師を招聘するとともに、共同研究メンバー5名から研究報告が行われた。ウズベキスタンからタシュケント国立文化大学教授のエルキン・アフンドジャンフ氏が「ウズベキスタンにおける出版：その歴史と現在の状況」、モンゴル国からモンゴル科学アカデミー歴史研究所のボルイン・ブンサルドラム氏が「モンゴル史研究における刷新の問題について」と題する講演を行った。両氏の講演は、いずれも書籍編纂や歴史記述において、社会主義期と体制崩壊後の状況との間に断絶面とともに継承面が存在することを明らかにするものであった。共同研究メンバーによる報告は以下の通りである。高倉浩樹（東北大学）「サハ共和国における歴史・文化認識の現代的相：学術制度と出版物に対する分析」／北川誠一

（東北大学）「南コーカサスのロシア語事情」／黒田卓（東北大学）「1920年代ASSR指導部の東方革命認識をめぐって」／浅村卓生（東北大学）「ウズベク言語政策と文学史：ナヴァーイー



講演するブンサルドラム氏

ーと母音調和をめぐる問題」／岡 洋樹（東北大学）「民主化後モンゴルにおける清朝支配評価の変化をめぐって」。これらの講演・報告から、体制の崩壊後に顕著に見られる民族主義的表象と伝統の再評価が、自己認識の新たな創出であると同時に、それが依拠している方法的基盤に社会主義期の学問研究や文化政策が強く影響していることが確認された点が、今回の研究会の成果と言えよう。

（岡 洋樹）

共同研究「20世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア（ソ連）史の課題と展望」 第2回研究会

共同研究「20世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア（ソ連）史の課題と展望」の第二回研究会が2008年3月24日にセンターで行われた。この研究会は2007年11月のセンター運営会議で承認されたばかりの新しい研究会で、20世紀の世界の政治、社会、経済に多大な影響を及ぼしたユーラシア大陸の二大国たる中国及びロシア（ソ連）の歴史について、特に20世紀前半期の両国に関わる未解明の課題に焦点を当て、双方からの研究情報を交換することで新たな知見を見出すことを目的とする。今回の研究会ではセンターの寺山恭輔、上野稔弘の両名が報告した。報告題名は寺山が「ノモンハン事件とソ連」、上野が「近代東北アジア边疆をめぐる資料の所在について」である。

寺山は1931年の満州事変後、1939年の関東軍とのノモンハン事件にいたる約10年間のソ連による対モンゴル政策を、主として軍事・輸送・動員面におけるソ連の関与の増大という観点から概観した。現代ロシアにおける最新の公開史料、研究の現状を網羅し、それらの研究で十分に上げられているとはいえないソ連共産党中央委員会政治局文書、特にオソバヤ・パプカ（特別ファイル）を丹念に追うことにより、ソ連の対モンゴル政策の実態、スターリンの関心の高さを明

らかにした。史料的な制約もあって日本側の関心が高いにもかかわらず、ソ連・モンゴル側の対応が詳しく知られていなかったノモンハン事件について日本史研究にとっても有用な情報を提供することができた。

上野は中華民国期、特に蒋介石指導下の中国国民党執政下の1930年代及び40年代の边疆民族関係の史料公開状況を概観した。中でも重要なのは1990年代以降の台湾における国民党大陸統治期の公文書資料の一般公開及びデジタル・アーカイブ化の進展である。その概要についてここ数年の現地調査の経験を踏まえて紹介するとともに、国史館の所蔵する蒋介石関連文書の中国近現代の边疆民族政策研究における重要性を指摘した。

なお本年度の計画として、寺山担当分については、今回の発表内容を『1930年代ソ連の対モンゴル政策』の題名で、センターの研究叢書として刊行する予定である。上野担当分については、今年度も台湾において国史館を中心に検索・閲覧を継続し、検索結果のデータを叢書としてまとめるための作業を行う予定である。

（寺山恭輔、上野稔弘）

2007年度東北アジア研究センター研究発表会

2008年3月28日（金）13:00～18:30、東北アジア研究センター4階大会議室において開催された。センターの次の8研究ユニットの本年度の研究経過、9共同研究の中間・最終の成果の報告が行われ、報告終了後には20分ほどの全体討論がもたれた。研究課題名と研究代表者は以下の通りである。（菊地 永祐）

研究ユニットの報告

- ・北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究ユニット（岡 洋樹）
- ・歴史資料保全のための地域連携研究ユニット（平川 新）
- ・白頭山の火山危機に関する日中韓3ヶ国共同研究ユニット（谷口宏充）
- ・北アジア戦略データベース構築研究ユニット（工藤純一）
- ・東アジア出版文化国際研究拠点の形成研究ユニット（磯部 彰）
- ・前近代における日露交流史料研究ユニット（寺山恭輔）
- ・東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット（栗林 均）
- ・リモートセンシング研究ユニット（佐藤源之）

共同研究の報告

- ・シベリア地域研究文献データベースの構築とロシア地方部におけるシベリア地域研究動向にかかわる調査（高倉浩樹）
- ・東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究（工藤純一）
- ・東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方（山田勝芳）
- ・中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的検証—中華民族多元一体構造論を中心に—（瀬川昌久）
- ・旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究（高倉浩樹）
- ・数理地理モデルによる東北アジア地域の土地利用形態の比較

分析（奥村 誠）

- ・旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究（岡 洋樹）
- ・西シベリア塩性湖チャーニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析（鹿野秀一）
- ・二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望（寺山恭輔）



センター研究発表会会場にて

◆ 客員教授紹介 ◆

スバンテソン 教授 (Prof. Jan-Olof Svantesson)

本年5月から8月まで、スウェーデンの Lund 大学からヤン・オロフ・スバンテソン教授が客員教授として赴任された。Lund 大学は1666年創立による300年以上の歴史を有する伝統ある大学であり、東北大学と大学間協定を締結している。

スバンテソン教授の専門は一般言語学と音声学で、アジアの諸言語、とりわけモンゴル系の諸言語やラオスのカム語を対象として現地調査を行い研究を進めてきた。モンゴル語の分野では、2005年に出版された『モンゴル語音韻論』(オクスフォード大学出版局)の業績でよく知られている。これは教授が1980年代からモンゴルにおけるフィールドワークで収集した音声データを実験音声学によって分析した資料を使いながら共時的・通時的な諸問題を扱ったもので、包括的なモンゴル語音韻論の研究書となっている。

本センターにおける客員教授の赴任期間中は、Cornelius Rahmn(1785-1853)というスウェーデン人宣教師が書き残し、現在ウプサラ大学に保管されている「カルムイク語辞典」の原稿の整理と研究を行っている。カルムイク族は、ボルガ川下流の右岸、カスピ海沿岸に居住するが、17世紀に中央アジアのモンゴル高原から移住してきた西部モンゴル系の「オイ

ラート」と呼ばれる部族の後裔である。

辞典の原稿は、「カルムイク語・スウェーデン語辞典」「スウェーデン語・カルムイク語辞典」「カルムイク語簡易文法」の三部からなり、カルムイク語は17世紀にモンゴル文字を改良して作られた独自の「オイラート文字」で表記されている。ヨーロッパでは、カルムイク語に対して比較的早くから関心が向けられ、辞書や文法書が編纂されたが、教授によれば、このカルムイク語辞典はヨーロッパ系の言語で書かれたカルムイク語(オイラート文字)の辞典および文法としてはもっとも古いものに属するということである。

センターでは、「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の中で、こうした研究内容で栗林と共同研究を行っている。

(栗林 均)



シベリア便り

前号(36号)でもお知らせしておりましたが、開所からこれまで10年間お世話になってきたロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所内のシベリア連絡事務所(研究棟237号室)を引き払い、共同ラボラトリとして新たなスタートを切るべく6月26日、オフィスの移転を行いました。過去、記録に残っているだけでも400名以上の研究者やビジネスマンたちが訪れたこの小さなオフィス。粗方の荷物を運び出し、最後に扉を閉める瞬間はやはり感慨深いものがありました。しかし、この部屋と完全にお別れというわけでもなく、聞くところに寄ると我々がこの部屋を出た後、ここは“共同ラボラトリ無機化学研究所分室”となってロシア人スタッフがオフィスとして利用するのだそうです。つまり共同ラボラトリではノボシビルスクに2カ所、東北大学キャンパス内に1カ所の活動拠点を持つことになり、この先、我々がこの古巣を訪れる機会も十分にあり得るということのようです。

新しい我々のオフィスはというと、ロシア科学アカデミーシベリア支部の開発技術エキシビジョンセンター2階に用意されました。ここはノボシビルスクの学園都市を訪れる研究者やビジネスマン、国内外のVIP人も必ず見学する場所で、産業導入が可能な段階にあるシベリア支部ご自慢の研究開発

が展示室されている施設です。ここには更にシベリア支部50年の歴史に関するフォトギャラリー、現在ノボシビルスクに開発中であるテクノパークの完成模型が展示されているスペースがある他、シベリア支部の《技術移転センター》、ノボシビルスク州の《アカデムゴロドク・科学テクノパーク財団》、韓国の《韓国ビジネス振興センター》等のオフィスも入居しており、州の将来を左右するような重要な組織が集結した空間といえます。我々が活動するには申し分のない環境です。更にエキシビジョンセンターの隣には日本人が経営するレストランもあり上質のサービスを提供しています。11年目を迎えた我々の新天地としてこの様な場所を与えてくれたシベリア支部の配慮に感謝したいと思います。

(徳田 由佳子)



エキシビジョンセンター前広場



モンゴル実験風景

(東北アジア研究センター・助教) 渡邊 学

2007年5月2日～7日、人工衛星観測と同期した地上実験を行うために、モンゴル/ウランバートルに滞在した。初めて降り立つウランバートルの空港とその周辺の風景は、昔からの僕の想像を裏切らなかった。どこまでも広く続く平原と、降り注ぐ太陽の光、草原の香りを運ぶそよ風。観光旅行であるなら、とても美しい情景であった。しかし、一日中屋外で実験をはじめると、この情景は異なる側面を醸し出し初めた。容赦なく照りつける太陽、時折吹き付ける強風、そして天候が悪くなると、そよ風は体温を奪う冷たい風へと豹変した。それでも5月という比較的穏やかな時期に実験ができた事は幸いなことであったし、ゲルに住んでこの天候の中を飄々と暮らしているモンゴル人のすごさを、少し慮る事ができた。

ウランバートルの近くで実験を行っている時の出来事であるが、突然強い風が起り、実験データや記録をメモしていた30枚ほどの紙が飛ばされてしまった。これが無くなってしまったら、何のためにここに実験しに来たのか分からなくなってしまう。一瞬頭が空白になった後、その場にいる皆と、遮るものなく風で飛



ばされていく紙の行方を追った。その時、中から様子を見ていたのであろうか？ 近くの道を通りかかったバスの中から、小～中学生程の子供が20人ほど出てきて、飛散している紙を追い始めた。彼らの手伝いのおかげで、数百m四方の範囲に飛び散った紙をほとんど全て回収できたのであるが、“バイルラー（ありがとう）”という言葉かけた後、彼らは何事も無かったようにバスに引き上げて、去って行った。自分も必死だった事も有り、これらの様子の写真を撮る余裕など全くなかったが、今でも心の中にはっきりと焼き付いている風景となった。

モンゴル市内の車の喧噪には、結構驚かされた。通常、このような実験を行う場合、レンタカーを借りて自分が運転をするが、この時は上司である佐藤教授からの、“運転手を雇うように”というアドバイスに従った。ウランバートルの片側多車線道路は、少しの隙間を目指して、車の割り込みがどんどん行われる。横断歩道の無い場所での、歩行者の斜め横断も頻繁に行われるため、中央線だけでなく、車線間にまで人がいて停まっている。少し郊外では、路肩走りなども良く見かけた。この状況を目の当たりにし、自分で運転していた場合、とても無事故で過すと切り切る自信はなかった。また、バスの代わりに、9人乗りのバンを用いて、移動サービスらしき業務を行っている人々を頻繁に見かけたが、中から出てくる人を数えたら15～16人程に達していた。

モンゴルの実験の目的は、衛星搭載センサの校正のための装置の設置(図)と、衛星データを用いた、土壌水分推定アルゴリズム開発のための、現地データ取得であった。現在そのデータ解析を行っているが、解析中、これらの強烈なモンゴルの様子が、時々頭に浮かんでくる。もう一度、行ってみたいような、行ってみたくないような、...

編集後記

皆様のご協力をおもちまして、今号は、何とかお盆休み前に印刷の全工程を終えることができそうです。私の編集担当は今号をもって一応終わりとなりますが、この1年間、遅れを重ねてしまったことを心よりお詫び申し上げます。

(柳田 賢二)